

歯に特徴あり デスモスチルス



▲ デスモスチルスの生態復元模型(当館1階展示)

科学博物館 1 階の人気者「ティラちゃん」の近くにいる左写真の動物(復元模型)をご存知ですか? 手足はワニやトカゲのように横に張り出し、体つきはカバのようにも見えます。その姿から恐竜やカバと思いついて入っている方もいるようですが、恐竜でもなければカバでもありません。これは 1500 万年前の

富山に生きていたデスモスチルスという哺乳類の仲間です。カバも哺乳類ですが、デスモスチルスはゾウやジュゴンにより近く、北太平洋一帯の海辺で生活していたと考えられています。

デスモスチルスの特徴はその奥歯の構造にあります。上の写真で口からつき出して見えている切歯(前歯)ではなく、この復元模型の口を覗き込んでも隠れて見えない臼歯(奥歯)です。デスモスチルスの臼歯は下の写真のように、ちくわを束ねたような不思議な形をしています。「デスモスチルス」という名前も、束ねた(デスモ)柱(スチルス)を意味しています。特徴的なのは歯の形だけでなく、生え方もまた特殊です。私たちヒトの歯は古い歯の下から新しい歯が出てきますが、デスモスチルスの臼歯は新しい歯が奥から前へと水平に移動して置き換わります。ゾウやジュゴンの臼歯も水平交換します(詳しくは 1 階ロビーのナウマンゾウの展示もご覧ください)。同じような歯をもつ動物が今もいれば何を食べていたか見当が付きますが、デスモスチルスのような歯をもった動物がいないので、食性については諸説あります。

富山県内では小矢部市岩尾滝や滑川市蓑輪からデスモスチルスの臼歯がみつかっています。また、デスモスチルスに近縁なパレオパラドキシアの臼歯も黒部市明日や富山市八尾町井栗谷から見つかっています。



(吉岡 翼)

▲ デスモスチルスの臼歯(レプリカ)